

(秘伝書と偽伝書)

神事に關する秘事をまとめしものが秘伝書であります。巷において一般の人が間違つて解釈するのはまだしも、名のある学者においても誤認されているのが「秘伝書」の現状であります。「秘伝書」とは、一般的な解釈では「人の目に触れてはならない秘密の書籍」となりますが、古来印度に於いては佛典を筆録することは、その神聖さを損なうものとして、師が機根を定めて特に選び抜いた一人の弟子に、口で伝えたものを弟子が後世誤つて残してはならないとして、一種の手引書を作製し、後日疑問点などを調べたり、師に尋ねて、朱筆でもつて書き加え、より完全なものとしたものが「秘伝書」の原形であります。古来「秘伝書」は師の茶毘の通りに焼くのが本義とされて来ましたが、後世においては師の最後に間に合わず、そのまま放置された「秘伝書」を、あわてて師の亡骸の安置場所に納めた例もあります。その有名なものに「石室の秘傳」と言われる「赤白二諦論」※があります。

何れにしても後世真実の教えが誤つて伝わらないようにする目的から、行われた「秘伝書」の考えが、神道においても、天台宗においても「口伝法門」となっています。真言密教においては、弘法大師の流れが二つに分かれ、その内の「廣澤流」においては「経軌を重んじる」に対し、「小野流」では「口伝に従う古伝方式」をとっていますが、高野山においては通称「十二口傳」なる古い口伝があります。これは「大日經奥疎講傳」の時の十二通りの口伝ですが、一通りの修行をすませたものの中から、選びぬかれた弟子が師の面前で口授されたのが最初であり、この後は全ての口伝に対し厳しい掟がしかれたのであります。此処で言う口伝は、「原則的には諸神諸佛諸菩薩に対しての秘密の作法に対して必要な、印信、作法、心得を、師が口外することを堅く禁止、面授口決を行った事」を指しています。

もちろん本覚思想にもとづく天台宗の口伝法門、真言密教にもとづく秘儀の伝授において、鎌倉時代以降秘儀の要点のみを墨書し、師の花押を書き加え授けていますが、此の場合の和紙が「切紙」であり、その際秘作法や、秘印信を師より「直接傳授」をうけ、師の許を得て切紙に書き入れる際、口頭の文字を略し「口」とし、伝授の文字を略「イ」とし、合わせ「ロイ」と書いたのが、「切紙口傳」であります。この口伝にもさまざま

な種類があり、一例を上げると宗門における「山内口傳」、その寺に代々伝えられている「寺傳」、師から授かる「師傳」などがあり、内容によっては通常の「口傳」に対し、一子相伝に値する秘事部門を説き明かした「重々口傳」があります。

奈良、平安の時代から、人は何故か家門を重んじ、家系を尊重するあまり、自分の家系に重みをつける眉唾物の家系図を作製していますが、伝授書も同様に鎌倉時代以降は、甚間における似非坊主、神主、行者、卜占師が、雨後の筍の如く輩出し、彼らはこぞつて「偽傳書」を珍重し、数多く作製しています。これをよしとされない方が、口伝を重んじ、一子相伝の後、内容の無い形だけの秘伝書を作製し、弟子に手渡している「白紙秘傳書」があります。

江戸時代に入り一部の国学者によって「國家神道」が流行したために、神道に関する偽傳書が数多く出回りましたが、それに対して「二子相傳による最奥秘傳あり」という、通称「留置秘傳」なるものがあり、さらに、印可許可状を持つものだけに、直接授ける秘伝が「直傳」でありますが、この秘伝の場合は、後世において正統な秘法が、世を乱すもといとならざる事と、さらに秘法の尊厳を保つために、あえて秘伝書、許可状のいは筆記されていません。長文となり、前文暗記不可能な場合は、差し障りのない件、暗

記させた事を思いださせるような文、など、うまくまとめた秘伝書はありますが、これだけを読んでも、書かれている意味がまったくわかりません。

特に、倭比賣命、度會、空海、叡尊、さらに多くの祖師が、純粹な正統神道秘伝を順守し、関係ない余人の目には触れる事も、その存在さえも、定かにさせていません。

（葛木神道秘卷）

あくまでも筆記を拒み、口頭伝授のみを行って来たものに、「葛木神道秘卷」があります。内容としては、かつての葛木法華道場の詳細な解説と、そこにおける修行内容、さらには最大の眼目である葛木神道のすべてが述べられています。その中で、世の多くの修験道関係者が求めて止まない秘傳も多く含まれていますが、戦後荒れ果てた葛木二十八宿行場を復活させる為に、天台寺門宗の中村健壽尊師が、さらに柱源神法の口書を、共に紐解かれた上で、行場を古式にもとづいて整備されたと聞きおよんでいます。

愚徒の場合は、葛木神道について、法螺貝山人より伝授を受くる際、醍醐理性院流にもとづき、口頭伝授で『葛木秘卷』と、さらに付随した秘伝も伝授されていますが、

『葛木秘巻』は、もちろん葛木の全てを網羅していません。これには驚くべき事が書かれています。一つは役行者が修験者ではなく、山岳法華行者であり、國造家ゆかりの賀茂の社主であるという事と、今一つは葛木(葛城)連山は、純然たる修験道の山ではなく、日本最古の山岳法華道場であるという事です。

古来葛木行場を知るためには、葛木ゆかりの行者が鎌倉時代までに纏められたと伝えられている『諸山縁起(大峯縁起、葛城縁起、一代峯縁起)』があります。現在は日本思想大系(一九七五)版(岩波書店)にもありますが、その第二十に『寺社縁起』があり、内容は大峯七十五摩(なびき)に相当する九十五宿を、紀州加太の友ヶ島より始まり、金剛山の峰々の行場を巡り、大和川の亀ヶ瀬で終わりますが、途中二上山付近で順番のない行場があり、中村尊師は「一切の迷夢を覚まさんがため、百八煩惱悉く打ち砕くため、百八行場に意図的にしたもの」なりと教示されています。

次に寛永十九年の奥付のある『葛城峰中記』があります。現在は山岳宗教史研究叢書(昭和五十九年版)『修験道史料集(鑑)』(名著出版)に収録されており、奥付を見ますと元禄十三(一七〇〇)年京都千勝院亮栄の著作で、『諸山縁起』と同じく百八行場に基づいて書かれています。同縁起の中には『葛城先達峯中勤式廻行記』があります。

宝永六年(一七〇九)快意と書かれて、村ごとに詳しい行場が記録されていますがその順序は書かれていません。

さらに嘉永三年(一八五〇)、和泉国犬鳴山七寶瀧寺智航上人の苦行記録を、智航が滝の本坊においてあったのを大阪堺筋和泉屋が出版した『葛嶺雜記』があります。これは昭和五十四年に摂河泉地域史研究会より再版されていますが、今日では手に入りにくいと思います。幸い七寶瀧寺より、平成元年に貴重な文献である葛城雜記を元にした『葛城回峰録』が出版されています。紀伊河内大和における行程二十八里五十四箇所の行所が詳しく説明され、行場の写真も多く記載されています。ごく新しいものとしては、醍醐山青年連合会阪奈支部より『行者さんといっしょ』が出版されており、現在の葛木行場が図解されているので、独りで行場巡りをするには最良の書かと思われまます。

これらの書物を読破しますと、何れもが修験道の観点より葛城山を修験行場として書いています。しかし、葛城山は本来修験道行場ではありません。これは葛城山系に数多く埋納されている経塚と、その埋納位置、その当時の史実を照合すれば、自ずから答えは返ってきます。即ち二上山、金剛山、梅尾山、嶺の龍王の主要な場所に法華經二十八品とこれを供養し奉る如法經二十九卷、般若經八卷が埋納され、此れらを守護するため

に、八方位の位置に「葛木八大童子」が設けられていることは、此の山が古代山岳宗教の発祥である法華行者の聖山であることの証しでもあります。

葛城山は尾根伝いに歩む所も多く、紀州河内大和の国境の屋根筋では、晴れれば遠くを遠望することも可能なれど、霧が袖道を這うように流れ、まさにこの世とは切り離された感があり、金剛の奥深く分け入れれば、苔むす大木が道を塞ぎ、日中と云えども薄暗き所もあり、急峻な谷間より吹き上がる白い霧は、両側の岩肌を隠し、獣道を消し去り、この世のさまと打って変わり、物音一つしない幽玄の彼方へと、誘われる事がしばしばあります。そして、いつしか己が信じる神佛と一体化する境地となることが、やがて修験の道へと変えたのではないのでしょうか。

（法華經と山の民）

佛教伝来は宣化三年（五三八）に百濟より伝来したと『上宮聖徳法王帝説』、『元興寺伽藍縁起併流記資財帳』に書かれた資料より定説となつていますが、『日本書紀』では欽明天皇十三年（五五二）となつています。しかし法華經持経者聖徳太子（五七四）

六二二）はそれより早くから法華經を研究なされたから、有名な『法華義疏』を書く事が出来たのではないのでしょうか。

その当時のようすをみますと、法華經は三世紀頃までに西印度で編修された大乘經典で、中国においては鳩摩羅什門下の竺道生（三五五〜四三四）が、妙法蓮華經疏を書いていきますし、慧遠（三三四〜四一六）の弟子慧觀（四〜五世紀の人）が『法華宗要序』を書いていきますから、すでにその頃には『法華經』が広く知れ渡っていたということですね。正式に佛教伝来するまでの間に日本各地に中国・朝鮮より数多くの渡来民が移住していますから、彼らが日々尊崇していた法華經があつても不思議ではありません。

山陰に漂流したものは大山の山の民、北陸に漂流したものは白山にいたる山の民、瀬戸内、南海に漂流したものは多くの葛木の山の民と交わって暮らしているうち、彼らが崇める佛は佛としてではなく、山の民の尊崇する神と変わらぬ異国の神として、自然に同化し祀られ、やがては異国の人も我が国に帰化して行くように、異国の神も我が国の神に帰化したのでありましょう。

現代人の最大の欠点は、何でも己の知識に頼りすべてを判断することと、無心・無欲・無布施の三無の精神が失われていることでもあります。常に私の心なく、天地自然の恵み

に感謝し、生きとし生けるものすべてと同化するという三無の心がなければ、到底古代人の考えは解釈出来ません。古代人の神は、天地自然にいます形なき不思議な力であり、また己れ以上の巨大な形をもつ存在を、目に見えぬ天の神の仕業と考えたのであります。天の神は天から天降（くだ）るものとしての考えから、清浄無垢で穢れのない場所なれば、たとえ高くない山なれど高山として崇めたのが「神奈備（かむなび）信仰」であります。

山の民は、自分たちの祖先は人として生まれてきても、死んで魂となれば今まで住んでいた場所から、年月とともに山に帰り少しずつ浄化して、やがては天の神と同化して祖霊となり、一族を守護する山の神になると信じられていました。この思想は木曾御嶽の御嶽行者に残され、たとえ異郷の地で死すとも魂は三ノ池に戻ると信じられ、特殊な盆供養が行われていました。

しかし生前悪しきことばかり行い、三無の心なく罪穢れにまみれた魂は、あまりにも重くして到底山上に登ることは出来ません。傷だらけになって沢や谷をさすらい、挙句の果ては陽の当たらぬ暗い谷間に沈んでいったのであります。これが山の民がいう地獄谷、もしくは忌谷（イヤ）。若しくはイミダニ）であり、その後における山岳行者が

山において魂の浄化を願い、罪障消滅を願うようになったのであります。

この思想は海の彼方の宗教に似通ったものがあつたので、佛教が早く受け入れられたのではないでしょうか。山の民はそれまでの祖霊山の神に対し、異国の神佛はすべて「あたしくにのかみ」、「遠い異郷の地の神」として受け入れていますから、ここより「蕃神」なる言葉が生まれたのでありましょう。もちろん異郷の地における神は、そのまま日本古来の神に対し、「客（まれ）神」として祭神の一柱に加えています。一例としてあげますと、平野祭神四座（平野神社・京都市北区）があります。第一殿の今木神は、桓武天皇の生母で帰化人系の高野新笠の遠祖である百済の聖明王。第二殿の久度神は、百済の祖仇度王。第三殿の古開神は、百済の沸流王と肖古王。第四殿の比賣神は、新笠であります。

ほかにも新羅の阿加留比売を祀る比賣許曾神社（大阪市東成区）、柏原市の大狛神社、八尾市の許麻神社、敦賀市杵見の信露貴彦神社、石川県鳳至郡穴水的美麻奈比賣神社などもあります。かつて古代朝鮮において白頭山を中心として盛んであつた太白山信仰も渡来民とともに伝わり、朝鮮の山神信仰に基づく巫女神を白山比咩※として石川県石川郡船岡山に祀り、今日の山の民ゆかりの白山信仰となつています。

渡来民の中には、法華經に帰依するものが多く、朝な夕なに法華經を誦するが故に「持経者」とも呼ばれています。現世において苦しみ多き暮らしをなすは、すべて前世における己が所業として懺悔するだけでなく、知らず知らずに犯せし罪科なれば、人として生まれた以上これを消滅させるも務めとして選んだのが法華經であります。『普賢菩薩第二十八の卷』に普賢菩薩は如何に世の中が悪に染まり、人が純粹な人の心を失い、御佛の教えを軽んずる者多く現れようとも、佛縁によりて法華經の存在に気づき、この教えを心から求めて受持し、朝夕に読誦し、經文を書写することによって、心の乱れがなくなる三昧の境地に至り、やがては一切の罪業が消滅し、諸佛諸菩薩に加護され、心の不安もなくなり、ますます精進するようになり、自分からあらゆる善を人にもすすめるようになるでしょう、しかし、人は悲しい生き物でそうなると増上慢の自惚天狗となり、せっかくの高邁な法華經の徳を失い身を滅ぼすものなればと、持経者のために陀羅尼を説かれたのであります。この陀羅尼の功徳によつて、持経者が金銭や物質にとらわれることなく、異性によつて心が惑わされる事なく、さらには人以外の邪悪なものにも、魔物などにも修行の邪魔をされる事がなくなり、さらなる功徳に因りて次の世においては^ハ刹利天^ニ生まれ変わり、安樂な暮らしを得ることも出来れば、法華經の教えを深く

守ることにより、この世においては心の安穩を得、死後においては兜率天上の彌勒菩薩のもとに行くことが叶うと云う、おおいなる功徳があると説かれているのであります。

法華經の教えに従い、法華經の教えを弘めんとして、持経者が諸国を巡り歩いたのが、俗に云う「廻国修行者」の始まりですが、彼らは常に口にするのは「懺悔懺悔六根清淨」であります。これは俗に云う懺悔經と云われる『法華經三部經』の一つ『觀普賢菩薩行法經』で、普賢菩薩が「六根清淨懺悔の法」を説かれています。金剛力士が間違つた考えを打ち砕く金剛杵で持つて、眼・耳・鼻・舌・皮膚・心の六根についている汚れを打ち砕くという喩えを引用し、ともすれば移り変わりいくさまさまな仮の姿に、心が惑わされて真実のものには目をおおいて見ることなく、真実の声には耳を閉ざして聞くことなく、いたずらに快樂の虜となりて貪り、諸悪の根源舌禍にて功徳の種を失い、心の欲するままに人の道を外しても欲望を求め、諸悪の根源なる心は汚泥にまみれていては未来永劫心が休まることなく、煩惱の虜囚となつて三界を流転するなれば、ここに御佛の前に悔い改めると云うのが、「六根清淨（ろっこんしょうじょう）」の教えであります。

かくして持経者が行く先々ですれ違ふことあれば、互いの六根清淨を願ひ、笠輪塔の

杖を左手で持ち、右手で施無畏の印をすれば、これに対しては左手で与願印で持つて応酬するのが、習わしとなったのであります。さらにこれが簡略化され、山の行場において互いにすれ違う際に、必ず下山者は狭い袖道を譲り、「懺悔・懺悔・懺悔・六根清淨、お登りさん御苦労さん」と先に声を掛ければ、「懺悔・懺悔・懺悔・六根清淨、先達さん御苦労さん」と応酬したのであります。

かくして法華經行者は、日本全国津々浦々の深山幽谷に行場を開いたのであります。彼らの六根清淨の思想は、兩部神道にもとづく同じ山岳修行者に受け入れられ、「六根清淨大祓」となり、「目に諸々の不淨を見て心に諸々の不淨を見ず、耳に諸々の不淨を聞きて心に諸々の不淨を聞かず、鼻に諸々の不淨を嗅いで心に諸々の不淨を嗅かず、口に諸々の不淨を言ひて心に諸々の不淨を言わず、身に諸々の不淨を触れて心に諸々の不淨を触れず、意に諸々の不淨を思ひて心に諸々の不淨を思わず」と唱えられています。

法華經行者が開いた深山幽谷の行場が、時代とともに山岳修行者に引き継がれることになっても、山の民が尊崇している山神を諸佛諸菩薩の垂迹として祀ったことが、權現の称号でよばれた所以でもあります。

かつて古代朝鮮において白頭山を中心としての盛んであった太白山信仰も渡来民と

もに伝わり、朝鮮の山神信仰に基づく巫女神を白山比咩ハクサンヒメ※として石川県石川郡船岡山に祀り、今日の山の民ゆかりの白山信仰となっています。渡来民の中には、法華經に帰依するものが多く、朝な夕なに法華經を誦するが故に「持經者」とも呼ばれています。現世において苦しみ多き暮らしをなすは、すべて前世における己が所業として懺悔するだけでなく、知らず知らずに犯せし罪科なれば、人として生まれた以上これを消滅させるも務めとして選んだのが法華經であります。

